

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2024年 5月 16日	
所属部局・学年	野生動物研究センター・M1
氏名	田之畑穂花

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、宮崎県串間市 幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・行動生態野外実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2024年5月7日 ~ 2024年5月13日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター 杉浦秀樹准教授、幸島観察所 技術職員 鈴木崇文氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回の渡航では、野生動物・行動生態野外実習として、宮崎県幸島でのフィールド調査体験および、ニホンザルの群れの行動観察と、宮崎県都井岬での御崎馬の行動観察を行った。
・スケジュール
5/7 集合/買い出し/幸島観察所にてフィールドワークの準備 5/8 幸島へ出発/ニホンザルの観察/ハイキング 5/9 ニホンザルの観察/浜にて海棲生物の探索 5/10 ニホンザルの観察/観察所に帰宿/発表準備 5/11 都井岬での御崎馬の行動観察/買い出し/発表準備 5/12 観察成果発表 5/13 片付け・清掃/青島観光/帰宅
・幸島にて
今回のニホンザルの観察は、私にとって初めての野生動物の行動観察だった。そのため、行動の記録の取り方やデータのまとめ方から、杉浦先生や鈴木さんに聞きながら観察を行った。初めてのニホンザルの群れの観察では、興味深い現象が多く目撃できたが、特に私が興味を持って追及してみたいと感じたのは、「親の階級が子の行動に影響するかどうか」という点だ。初日の観察のムギ蒔きの際、自ら積極的にムギを食べに行く幼児と、隅の方で周囲を気にしながらソワソワしているだけでムギにありつけない幼児がいた。この2タイプの違いは単純に性格の違いなのか、それとも親の階級に影響しているのか疑問に思った。観察の結果、やはりハイランキングの親の元に産まれた子ほど、一人で食事をしたり一人で遊んだりする時間が長く、ローランキングの親の元に産まれた子は親と一緒に過ごす時間が多かった。二日間しかデータが取れなかったのが、真偽はわからないが、やはり親の階級が子の行動にも影響すると推測された。ニホンザルの観察を通して、自分が疑問に思った行動から仮説を立てて、データを取って検証することの面白さを身に染みて感じた。群れをずっと見ていたら、この行動は何だろう？この2匹の違いは何だろう？と様々な疑問が生じ、胸が高鳴った。山中でのハイキングでは、登山道がないため、基本的には地図(たまにGPSも)で自分の位置を把握し、コンパスで歩く方向を決めるといふ、サバイバルな経験をした。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



ローランキングの親子（ポタン）



ハイランキングの親子（タカナ）

・都井岬にて

都井岬では、野生の御崎馬の観察を行った。野生動物研究センターの卒業生である前田玉青氏と M2 の小川あゆみさんに馬の話を知ることができて大変興味深かった。0歳～2歳くらいまでの仔馬は、人間に興味津々で、周りの観光客や私たちにぐいぐいと近づいてくることに驚いた。

馬は休む際は、数頭でまとまって休んでいた。単に草食動物の習性からそのような行動が見られるそうだが、他にもまとまっている方が、ハエが付きづらいといった理由も考えられるようだ。また、まとまる際は危険を察知して群れを守るために、オスが外側になることが多いようだ。短時間の観察だったが、一つ一つの行動にも理由があることが分かって、とても面白かった。



人間に興味津々の仔馬



まとまって休む馬たち

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

実習中は、杉浦秀樹准教授、鈴木崇文氏にご尽力いただき、充実した日々を過ごせた。重ねて深く感謝申し上げます。